

美術運動

日本美術会編輯



夫 (1884 作) ゴッホ

主 張 創刊の言葉

敗戦後一年、復興は遅々として進まない。美術の分野でも同じ事が言える。秋の展覧会場を歩いていると、鉄跡の閉市を通つてゐるような暗たんとした氣持になる。いろいろな作品が喧く並んでゐるが、どれもこれもあやしげなバラック建ばかりである。がつしりした筋金入の本建築をうちたてねばならない。今、美術の廢墟に立つて思うことは今度こそ基礎工事からしつかりやらねばならぬということである。美術建設の基礎となるものは民衆の美術的水準の向上である。つまかさねられた過去の技術の達成と民衆のはかりしれない獨創力を結び合はすことが今後の美術建設運動の大眼目となるであろう。すべての眞面目な美術家の努力は主として此處に注がれるであろうし、本紙の使命も又ここに見出すことが出来る。美術社交場でおしゃべりすることではなく、眞の美術建設運動のわらぢばきの組織者となることが本紙の最大のねがひである。讀者諸賢の御鞭達を切をお願いする次第である。

本紙の編輯は日本美術会が擔當して行くことになつた。編輯者の御挨拶の意味で下に日本美術会の綱領を掲げる。この綱領は同時に本紙の編輯方針でもあるわけである。

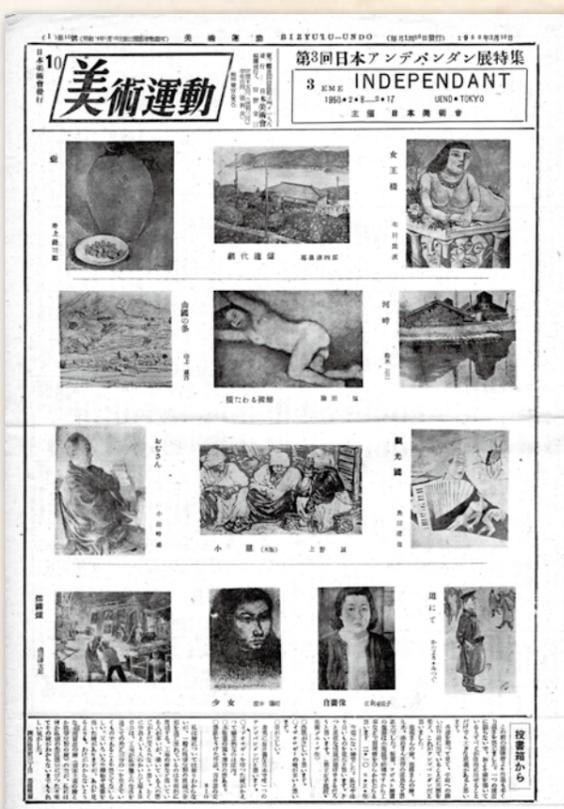
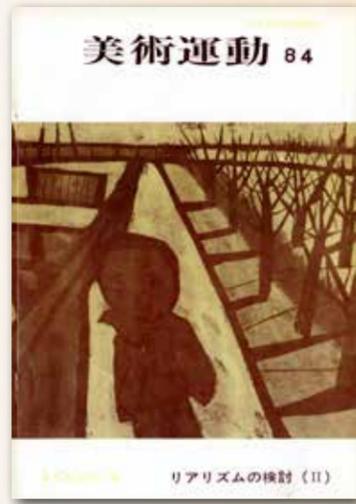
- 1、民主的美術文化を創造し普及する。
- 2、美術を人民へ開放しその美術的資質の昂揚をはかる
- 3、美術に関する封建的な制度やその因襲を排除する。
- 4、美術家の自由な創作生活を擁護する。
- 5、内外の進歩的な文化活動と積極的に提携する。

今や美術建設の爲の新しい土はたがやされはじめた。併しその爲には又廢墟にころがついてる古い安建築の腐つた殘骸をうちこわしとりのぞくことが必要だ。建設の合圖は同時に闘いの合圖である。全國の津々浦々にこの合圖が高らかに呼び交わされねばならない。

美術を民衆へ！民衆の美術を！
(永井 潔)

1947年1月15日 印刷
1947年1月20日 發行
編輯 日本美術会 キムラ・シゲオ
發行人 ゴミ・ヒサナオ
發行所 書店・赤い星

東京世田谷區祖師谷 2-1139
定價2圓 豫め10圓
東京・豊田區 五尾山町10



復刻に際して

一九四七年一月に創刊された『美術運動』は、日本美術会の単なる機関紙に留まらない。無鑑査であるアンデパンダン展と同様「自由と民主主義」を願う者達が本紙に寄稿を繰り返して、今日に至っている。

どの時代でも幅広く、柔軟な記事と論文が集う『美術運動』は近現代美術史の研究者から注目されてきたが、その本質を知った上で最初に調査に踏み切ったのは、アメリカ人のジャスティン・ジェスティだ。「『芸術新潮』や『美術手帖』という資本主義の雑誌だけではダメだ」と。

本紙を読み解くことは、芸術だけに限定されることなく、その時代の文化と触れ合うことができる。この箱の蓋を開けてみようではないか。

宮田徹也 (嵯峨美術大学客員教授)

主要執筆者(五十音順)

- | | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 赤松俊子 | 小田切秀雄 | 鶴岡政男 | 本郷新 |
| 麻生三郎 | 織田達朗 | 徳大寺公英 | 松谷 彊 |
| 栗津 潔 | 小野忠重 | 富永惣一 | 松山文雄 |
| 池田龍雄 | 桂川 寛 | 富山妙子 | 丸木位里 |
| 石井柏亭 | 河北倫明 | 永井 潔 | 水沢澄夫 |
| 井手則雄 | 河野 新 | 中島健蔵 | 箕田源二郎 |
| 井上長三郎 | 近藤日出造 | 中野重治 | 宮川寅雄 |
| 入江比呂 | 佐々木基一 | 中村 宏 | 棟方志功 |
| 上野 誠 | 佐田 勝 | 難波田龍起 | 森口多里 |
| 内田 巖 | 新海覚雄 | 野口彌太郎 | 安井曾太郎 |
| 江川和彦 | 末松正樹 | 裕伊之助 | 矢部友衛 |
| 大島辰雄 | 須山計一 | 羽仁五郎 | 山川惣治 |
| 大月源二 | 瀬木慎一 | 針生一郎 | 吉井 忠 |
| 岡鹿之助 | 高田博厚 | 土方定一 | 吉澤 忠 |
| 岡本太郎 | 瀧口修造 | 福田新生 | 渡辺皓司 |
| 岡本唐貴 | 多木浩二 | | |